

第 29 回大阪大学野田村サテライトセミナー 「野田村の宝を語ろう」

2015 年 7 月 11 日、野田村生涯学習センターにて、「第 29 回大阪大学野田村サテライトセミナー」を開催しました。今回のセミナーは、今年 3 月に弘前大学出版会から出版された「がんばるのだー岩手県九戸郡野田村の地域力ー」を記念して、7 月、9 月、12 月の合計 3 回シリーズで行います。第 1 回目は、野田村の農業と趣味活動を行っている方々に焦点をあてた「野田村の宝」の紹介です。今回は、弘前大学と合同開催で、野田村で農業と趣味活動を行っている方に焦点を当ててセミナーを行いました。講師には、震災直後から野田村に関わってくださっている京都大学の永田素彦先生と東京学芸大学の山口恵子先生を迎えました。また、書籍に登場されている小野寺信子さん、宇部はつさん、中野琴子さんにお越しいただき、自らの経験を語っていただきました。今回は、いつもセミナーを行っている大阪大学野田村サテライトを飛び出して、野田村生涯学習センターでセミナーを行いました。

今回も、遠隔教育システムを使用して、野田村生涯学習センターと大阪大学吹田キャンパスをつなぎ、同時中継でセミナーを行いました。そのため、野田村在住の方をはじめ大阪大学の学生とも交流を深めることができました。



第一部でご登壇された永田素彦先生

第一部では、永田素彦先生の発表『『がんばるのだ』農業で地域を元気に』から始まりました。永田先生と野田村の農業との出会いは、震災直後にまでさかのぼります。災害直後、ボランティアとして野田村に入った永田先生が最も困ったのは、昼食をどうするのかということでした。当時は、まだ飲食店の営業が再開されておらず、昼食をとる場所が無かったそうです。そのとき、直売所で売っていた野田塩のおにぎりを食べ、野田村の食と農に触れたそうです。その後、ホタテや鮭、キノコや野菜などさまざまな野田村の食べ物を食べ、野田村の食べ物は、何でもおいしいことに気付き、俄然野田の農業に興味がわいてきたそうです。さらに、仮設に移られた方の話が「畑がないから、持っていくものがなくて、人の家に遊びに行きづらくなった」とおっしゃっているのを聞いて、生活に根付いた野田村の農のことをもっとよく知りたいと思うようになったそうです。

今回の発表では、米田やすさんと、小野寺信子さんのライフヒストリーを中心にお話されました。

米田やすさんは、野田村で商品用の花の栽培を始め、また、地域の女性たちの交流の場としても機能するようになった産直「安来（あんくる）」を開設した方です。野田村の若いお嫁さん達の間では、遠慮や気遣いからおすそわけの習慣が衰退し、家ごとのつながりの意識が薄くなっていました。こういった状況の中で、つながりの場を作る必要がありました。さらに、若いお嫁さんたちが、お姑さんから離れて楽しめる時間、空間を提供しようと、産直を開設されました。現在では、野田村伝統の豆腐作りを通して、野田村の子どもたちに野田村の歴史と食の大切さを伝えています。

小野寺信子さんは、もともと保育所で調理師として勤務されていましたが、2002年に一念発起して農業を始められたそうです。その動機は、子どもたちに安心安全な食材を食べさせたいというものでした。現在では、「かまどのつきや」をオープンし、産直に商品を出され、農家食堂の調理師として活躍されています。

米田やすさんも小野寺信子さんも農業を通じて、様々な人のつながりを作っておられます。それは、野田村の女性たちや、野田村の大人と子どもの間のつながりだけではなく、野田村の人と外部ボランティアのつながりをも作ってきました。このように、「地域の人々の交流」、「伝統の継承」、「世代間交流」、「外部者を惹きこむ魅力」が野田村の農業にはあり、地域の活性化が果たされるのではないかと永田先生が提言されました。

次に山口恵子先生が「野田村の宝を語ろうー趣味活動からー」と題して発表されました。まず、宇部はつさんが会長を務めておられる「絵画趣味の会」について紹介されました。「絵画趣味の会」は、20年以上前、野田村教育委員会による絵画講座の後、参加者同志で解散するのはもったいないということになり、「絵画趣味の会」としてその年に正式に発足しました。12年ほど前、全国的に流行した絵手紙を取り入れ、現在の活動のかたちが出来上がりました。現在では、月に1回の絵手紙教室と2月に1回の水彩画教室を開催し活動しています。絵葉書について、宇部はつさんは、「絵手紙には、言葉があり、手紙であるから、

コミュニケーションになる。人と人とのつながりの中でやっていく方が活きる」とおっしゃっていました。

中野琴子さんが代表を務めている「グラシアの会」は、2011年7月、野田中学校仮設に住む女性11人を中心にスタートしました。被災地支援の一環で手芸の材料を寄付していただいたことがきっかけでした。当時の思いとしては、「集会所でたくさんの人が集まってきていいな」というものだったそうです。現在では、定期的に活動を続け、そこで作った手芸品や織物を販売することで得たお金を活動費に充てているそうです。

さて、それほどお金になるわけでも、雇用を生むわけでもない趣味活動がどのようにして「野田村の宝」になるのでしょうか。山口先生は、以下の4点を指摘されました。①まずもって、楽しいこと。それによってQOLが高まる。②集まるきっかけになる。おしゃべりによって、気分が軽くなる。③ボランティア活動など人を支える活動への広がりを持っている。④村外への広がりつつながりの構築。仲間が増える。商品を通じてつながる。つながりは、未来へ向けた資源となる。これら4つを重視していくことが大切だと山口先生は、締めくくりました。



第二部の様子。左から、李永俊先生、永田素彦、小野寺信子さん、中野琴子さん、宇部はつさん、山口恵子先生

第二部は、小野寺信子さん、宇部はつさん、中野琴子さんをお迎えして、座談会形式で、震災から4年以上が経過した現状についてお話していただきました。

小野寺信子さんは、「自然の力を受け入れなきゃなんないということを震災で改めて感じました。田舎は、自分で食べるものは自分でつくんなきゃなんないから、それはつまり、自然の力を受け入れるということなのかなと思っています。私個人としては、食の大切さについて、食を作るには、山を海も大切だし、そういうところで野田を見てもらえればいいなあと考えております。そして、野田村の次世代を担う子どもたちにも伝えていきたいです」と話してくださいました。

宇部はつさんは、「今回、山口先生にお話し終えた後、震災後の気持ちが放出された、安心した、誰にも言えなかったことが言えたと感じました」と感想を述べられ、「被災した後に、巻物を作りませんかとお誘いがあった、でも、「絵画趣味の会」では、今まで巻物を作ったことが無かったので、ありもので何とか作ったというのが本当のところ。そして、東京駅のちかくにある通信総合博物館に展示されました。みなさんいろんな思いを率直に書いていて、今も読むと涙がでるような内容です。また、震災時に避難した愛宕さんの景色を今、描いています。描いていると、当時のことを思い出しますが、描くこと、展示することを通じて野田村を発信していきたいとおもっています」と話してくださいました。

中野琴子さんは、「私たちの活動は、ただ私たちの楽しみのためにやっている活動です。私は、3. 11で被災し、家も流されてしまい、仮設に住むことになったのですが、以前の生活とすっかり変わってしまって、何もすることが無かったんです。その時にボランティアさんが手芸道具を持ってきてくれて、手芸を一緒にやった時に心の安らぎを感じたんです。できれば、野田の人も野田に訪れた人も、ちょっと立ち寄ってさをり織りが体験できるような場所ができたらいいなと思ってやっています。野田はまだ復興の途中ですので、外部から来られた人は、復興の過程を見ることができると思うんですけど、楽しめるってところは少ないのかなって。グラシアの会は、そういうような活動を通して存続していければいいなと思います。」とお話してくださいました。

第29回大阪大学野田村サテライトセミナー「野田村の宝を語ろう」も盛況にうちに無事終了しました。次回セミナーは、8月11日に大阪大学野田村サテライトで行う予定です。